
ラン・ボーイ・ラン（「走る男」改稿版）

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラン・ボーイ・ラン（「走る男」改稿版）

【Nコード】

N0453Y

【作者名】

ごはんライス

【あらすじ】

4000字設定。ドタバタコメディ。とにかく走り続ける男の話。

（前書き）

前書きを忘れてきた！

オレは走らなくてはいけない。理由などない。走らねばならないのだ。ゴールなんてない。そんなものあるわけない。だって、オレが走る目的は走ることだから、ゴールなんてないのだ。

「はアはアはア」

ノドが渴いた。オレは自販機を探す。「あ。あった」
ポケットから財布を探す。む。ない。落としたか。

オレはやむをえず、コンビニに入った。

「一個、もらつてくね」

「たけしさん！ がんばってください！」

店員と握手してから店を出る。

みんなの期待に応えねばならない。オレは走らねばならない。

ああ。それにしても疲れた。まったく何てことだ。今、気づいたのだが、これ給料なしでやってる。

なぜだ。なぜ給料が出ないのだ！ こんなに苦しいのに！

そう考えるとだんだんペースが落ちてきた。

あ。止まっちゃった。

ででーーーーーん。

「たけし、アウト」

どこからともなく、マッチョな黒人が二人現れた。なぜかブリーフいっちょうだ。

一人がオレの腕をつかみ、一人がオレの尻に両方の人差し指で浣腸した。

「うぎゃあああああああああ」

黒人二人はどっかに去っていった。

「しくしく」

オレは悲しい。アスファルトに女座りになり、しくしく泣いてい

ると、前から小学生たちがやってきた。

「わアたけしさんだ」

「ほんとだ。ホンモノのたけしさんだア」

ちびっこたちがオレのまわりを囲む。

「たけしさん、今日はどこを走ったんですか」

「うん。滋賀県から京都府まで」

「わアすごい！」

ちびっこたちがサインちょうだいサインちょうだいというのでTシャツとかに書いてあげた。

「ありがとう！」

「ふふふ。君たち、走るの好きかい？」

「うん！ 嫌い！」

オレは元気が出てきた。あのちびっこたちのためにもオレは走らねば。

「はアはア」

沿道の人たちが旗をふる。

「たけしさん。ファイトお」

「がんばれ！ がんばれ！」

「はアはアはア」

夜となり、オレは眠くなってきた。これはいかんと思い、覚せい（プーーーーっ）い剤を吸引した。

一気にハイテンションとなった。

「うおおおおおおおおお」

警官に捕まった。

「ちよつと。おまわりさん。オレ、走らないといけないんだよ」

「ダメだダメだ。こんな夜中に怪しい」

「そんなア」

しかも、覚せい（プーーーーっ！プーーーーっ！）剤を持ってるのが見つかった。

「ふん。署まで来るんだ」

「やだやだやだ。オレは走るんだ。走るんだい！」

沿道の人がオレをじっと見つめてる。

「ああん！みんな！助けて！」

みんな、足早に去っていった。

「ちきしょう！！！」

オレはむかついてきて、警官の股間を蹴り上げた。

「うひゃあ！」

「やまもっさん！」

オレは逃げた。

「はアはアはア」

これはいかん。警官にバカなことされてたらお腹がすいてきた。
どうしよう。

オレは、畑にすいかがあつたので、一個割った。

「しゃりしゃり。んまい」

元気が出てきた。

「ようし。走るぞ！」

オレはすいかの皮を放り投げた。

それがダンプカーの窓に叩きつけられた。

「うわああああああああ」

視界が狭くなり、ダンプカーは右にそれた。前から走ってきたトラックと衝突した。

「うわああああああああ」

うーうー。うーうー。

えらい騒ぎになっている。なんてことだ。

しかし、オレは走らねばならぬのだ。気にはおれない。

「はアはアはアはア」

あきらめちゃいかなのだ。あきらめなければ夢はかなうのだ。
かなうのだ！

オレは、しかし、またやばいことになってきた。

風俗街に入ってしまったのだ。

「お兄さん。遊んでかなーい？」

「一万円でいいよ！かわいい子そろってるよ！」

やばい。やばい。やばい。勃起^びしてきた。

ちきしょう。走りにくい。ごつつ走りにくい。

オレはこれじゃあ走ってられないと思って一発抜いてから行くことにした。

ヘルスの前で立ち止まった。

でーなーなーん。

「たけし、アウト」

うわ。まさか。また、黒人が。

と思ったら、ガングロの女子が二人きた。

一人がオレの腕をつかみ、一人がオレのズボンを下ろした。

しばらくお待ちください。

オレは元気になった。すっきりした。ようし。走るぞ走るぞ。

ああ。だんだん走るのが愉しくなってきた。ハイになってきた。流れる景色が心地よい。

「うははははは。ニューヨークまで行けそうな気がするぜ」

オレは調子に乗っていた。

とその時。

三年前に出発して以来家で待っていたはずの妻が、他の男と腕を組んで歩いてるではないか！

「あ。ロリ華。なんだその男は！」

「げ。たけし」

「うぬぬぬ。ちきしょう。浮気だな！」

ロリ華はわめいた。「あんたが帰ってこないのが悪いんでしょう！」

「ちきしょう！ ちきしょう！」

オレは地団太を踏んだ。

浮気相手が話に割ってくる。

「まアまアたけしさん。落ち着いて」

「これが落ち着いてられるか！オレが真面目に走ってる間にこいつは！こいつは！」

ロリ華は泣き出した。

「だってあたしさびしかったんだよ。たけしが出発してからあたし毎日泣いて暮らしてたんだよ！」

「ロリ華ア」

オレもしんみりしてきた。

三人で暗く、アスファルトに立ち尽くした。

ででーーーん。

「三人ともアウト」

「ええっ」

マッチョな黒人三人が電柱の影から飛び出した。

「うぎゃあああああああ」

三人とも浣腸された。

「うっ。痛い」

「痔が」

オレはふらふらしながら立ち上がった。

「こんなバカなことしとれん！オレは走らないと！！！」

「ああん。たけし。待って！」

走る。走る。オレは走る。

ゴールなんてない。目的が走ることなんだからあるわけがない。ただ、ただひたすらオレは走るのだ。

理由は太陽が知ってるさ。

「はアはアはア。はアはアはア。コンビニで味噌汁とおにぎりをもらってこよう」

煙草屋の角を曲がれば、朝日がオレに向かって近づいてくる。

オレはコンビニを出てからも走る。眠かったので、目をつむりながら走った。

すると、当たり前かも知らんが、歩行者とぶつかった。

「痛いなあ」

「ごめんなさい、ん」

何と、その歩行者は、すごい美人だった。

「えへへへへ。おわびと言っては何ですが、お茶でもしませんか」

「ふうん。いいわよ。ひまだから」

「あざす！」

オレと美人の女の子は、最寄の喫茶店に入った。

「ふうん。君、走ってるんだ」

「そうなんです。えへへへ。走ってるの」

「えらいねえ。あたしなんて歩いてばっかよ」

「いえいえ。歩くことも立派な行為ですよ」

話は盛り上がった。

しかし、オレは重大なミスに気づく。

「オレ、走ってないやん！」

「ん？ そりゃそうでしょ。お茶してんだから」

「これはいけない！」

オレは、あわてて、女の子の分も会計を済ませ、喫茶店を飛び出した。

女の子が手を振る。

「がんばって走ってよー」

オレも振り向いて走りながら、手を振る。「ありがとー。わかったー」

走る走る走る。

まったく走るってのは愉快爽快じゃわい。最高じゃい。

オレはノリにノッて、逆立ちして走ってみた。

まわりの人たちがげらげら笑う。

「そんなにおかしいのかな???」

オレは、しかし逆立ちして走ると気分転換になるので、そのまま逆立ち走行をした。いつも同じ走り方じゃ、気持ちが滅入ってしまう。

しかし、だいぶ暑くなってきた。もうお昼だ。

オレはあまりに暑いので、これはいかん焼け死ぬと思って、川に飛び込んだ。

バタフライで泳ぐ。気持ちいい。冷たくて気持ちいい。

しかし、走る男から泳ぐ男になってしまった！

「なんてことだ」

しかし、気にしていてもしょうがないので、そのまま泳いでいった。

川をどんどん泳ぐと、前から船が来る。

オレは、泳ぐのに疲れたので、船に飛び乗った。

「おい。勝手に乗るんじゃない」

「なにおう生意気言うな」

オレは船頭のほつぺたを叩いた。

「な、なにをするんだ」

「うるせえ腹へった。飯持って来い」

最初、船頭は逆らったが、腹にパンチを二三発お見舞いしたら、サンドイッチを持って来た。

「むしゃむしゃ。旨い。おい。飲み物持ってこい」

「なにい」

「早く持ってこい」

船頭のケツを蹴飛ばしたら、走ってコーラを持ってきた。

「ごくごく。しかし濡れてるから気持ち悪いな」

オレは服を脱いで干した。

「おい親父。この船はどこ行くんだ」

「ふん。どこだっていいだろ」

「なに生意気な」

オレは船頭の頭をスリッパで思い切り叩いた。船頭は涙目だ。

「海に行くんだよ」

「海かあ。いいね。外国に行くのかい。あ。タバコある？」

「ねえよ。さつきから何だ。命令ばっかしやがって。年下だろ」

「生意気な野郎だな」

オレは船頭を持ち上げた。

「うわあああ。怖いいいい」

川に向かって放り投げた。

どつぱーん。

「あつぷあつぷ。わし、泳げない」

そのまま流されていった。オレは手を振った。

ドアが開き、船長らしきおっさんが現れた。服が船長ばい。ひげを生やしてパイプをくわえてる。

「おい山ちゃん。わしのハイチュー知らん？ ン。誰だお前」

「たけしだ。お前は」

「年下のくせに生意気な口の聞き方だな」

「なにい。へらず口を叩くな」

オレは船長を持ち上げた。

「怖いいいいいい」

川に放り投げた。

どつぱーん。

そのまま流されて行った。オレは手を振る。

「お。この船はオレのものになったのか」

オレはドアを開き、操縦室に入った。舵をとる。

「よう考えたらあいつ船頭じゃなかったな」

オレは口笛を吹きながら運転する。

もちろん、フリチンだ。早く服乾かないかな。
太陽がキラキラ照る。

オレははつと気づいた。

「走ってないやん！」

まずいぞこれは。オレは走る男なのに、いつの間にか船長になってしまっている。

数奇なるは人の運命。

「これはまずいぞ。やばいぞ」

オレは腕を組んで唸る。

オレは、舵をとり、そのまま、船は、陸地に乗り上がった。民家を潰して行き、やっとな止まる。

オレは服を着て、船から飛び降りた。

「うわあああ。ママあああ。ママあああ」

ちびっこが死んだお母さんに抱きつき、号泣していた。船にはねられたのだろう。オレはちびっこの肩を優しく叩いた。「強く生きるんだよ」ちびっこはオレを殺してやるみたいなの目付きで睨んだ。ムカついたので、頭をひっぱたいた。「うわあああ。うわあああ。うわあああ」

オレは再び走り始める。警察がパトカーで追いかけてくる。

走る。走る。走る。

オレたちは明日に向かって走る。

不況なんて関係ねえ。

オレたちは、ただひたすら走るんだ。世の中の陰鬱など吹き飛ばすぜ！

（後書き）

後書きが行方不明！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0453y/>

ラン・ボーイ・ラン（「走る男」改稿版）

2011年10月30日06時22分発行